

Thoreau の旅*

—“A Walk to Wachusett”—

六 川 信**

ソーロウ (Henry David Thoreau, 1817-1862) は、アメリカにおける backpacking tourists の草分けの一人であった。彼は自然への旅を愛した。生誕の地 Concord を中心とする New England の旅が主であったが、その方法は糧食や野営用具を携行し山野を歩くバックパッキングによることが多かった。汽車、馬車、舟も利用したが、バックパッキングの徒歩旅行を中心とした。当時、大学生の間でもこの方法は人口に膾炙していなかった。自然が深いニュー・イングランドの森林や荒野の奥地へ分け入るのは狩猟人か伐採者に限られており、一般人が休養や気晴らしに行くなどは例外であったのである。テントを張ることも信仰伝導集会等大勢の人を召集するためであって、個人が野営のためにすることはほとんどなかった⁽¹⁾。

古今東西の多数の旅人と同じくソーロウも、旅について語り講演しエッセイや旅行記を書いた。旅の記録としての紀行文を超えて、文学作品に仕上げているところに、ソーロウが近代アメリカの代表的作家の一人に数えられる所以がある。本稿は、ソーロウの最も初期のエッセイ “A Walk to Wachusett” をとり上げ、その作品としての価値の検討を試み、ソーロウの旅から生まれた旅物語の特質を考察することを目的とする。本論に入る前に、周知のことではあるが、ソーロウの旅から生まれた作品を概観しておくことにする。

1

1839年の夏の終りに、ソーロウは兄 John と共に二週間に亘るバックパッキングの舟旅に出発した。コンコード川を下り、メリマック川を溯り、ニュー・ハンプシャー州のthe White Mountains の最高峰 Mt. Washington (1,919m) 登頂を果たした。敬愛するこの兄は1842年1月11日急死し、ソーロウは悲嘆にくれ6週間 *Journal* を書くことすらできなかった。しかし、1843年暮れ近く Staten Island からコンコードに帰ったソーロウは、兄の追悼のためにこの旅行記を書くことを決意する⁽²⁾。Walden 湖畔での独居生活は、その執筆のためでもあった。超絶主義の代表的作品 *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849) (以下 *A Week* と略す) は、この舟旅を土台としている。

Walden 湖畔での独居生活中、*A Week* の第一稿が完成し *Walden* にとりかかる前の1846年9月に、ソーロウはメイン州 Bangor 在住の従兄 George A. Thatcher と Bangor の Lowell と Raish の2人に加えて白人の船頭兼案内人の George McCauslin と Thomas Fowler と共にメインの森へ旅をし、Mt. Katahdin(1,608m) 頂上近くまで登った。この体験を1848年にコンコード・ライシーアムで講演し好評を博したソーロウは、それをエッセイにまとめ、

* 中部地区英語教育学会において発表

** 一般科 英語 教授

原稿受付 昭和58年9月24日

Union Magazine of Literature and Art (1848) に “Ktaadn, and the Maine Woods” と題して、7月から11月まで5回に分けて発表した。1853年9月彼は再度 George A. Thatcher とインディアンの Joe Aitteon と共にメインの森に旅し、そのエッセイ “Chesuncook” を *Atlantic Monthly* (1858) に6月から8月に亘り発表した。荒涼たる荒野と野生にひかれたソーロウは、1857年にもコンコードの植物学者 Edward Hoar とインディアンの Joseph Polis を伴い同地を訪れ、翌年旅行記にまとめ、死に至るまでその草稿に手を加えていた。三回のメインの森への旅の物語は彼の死後まとめられ、*The Maine Woods* (1864) として出版された。

ソーロウは、1849年10月、1850年6月、1855年7月、1857年6月の4回に亘って Cod 岬を訪れた。*Cape Cod* (1865) はこの旅の体験に基づいて書かれた。1850年9月に、ソーロウは友人 William Ellery Channing (1818-1901) と共にカナダの Quebec を訪れ、Mt. Royal の丘に登り Montreal を一望におさめた。1850年の秋コンコードに戻ったソーロウはこの旅物語の初稿を書いたと推測される。1850年10月の *Journal* に “Left Concord, Wednesday morning, September 25th, 1850, for Quebec. Fare \$ 7.00 to and fro. Obligated to leave Montreal on return as soon as Friday, October 4th. The country was new to me beyond Fitchburg.”⁽³⁾ という簡単な記述の後、*Journal* は84ページに亘って欠落している。明らかにカナダ旅行の記事と思われるが、マニユスクリプトは残存していないらしい⁽⁴⁾。1852年1月にコンコードのライシーアムで講演したソーロウは、3月にエッセイに整える。これは “An Excursion to Canada” と題して *Putnam's Magazine* に1853年1月から3月まで掲載された。ソーロウの死後、Sophia Thoreau と William Ellery Channing によって *A Yankee in Canada* (1866) と改題されて出版された。

1861年5月、ソーロウはミネソタ州への1500マイルにのぼる旅を決行する。Toronto, Milwaukee, Detroit, Chicago そしてその西方の Redwood Falls まで足を踏み入れた。結核の療養を目的としたこの旅は、かえって健康を害するという結果に終わった。翌年5月6日死を迎える彼は、この旅の物語を書きようもなかった。ニュー・ヨークで書かれた重要なエッセイ “A Winter Walk”——1843年10月 *The Dial* 誌に掲載——はコンコードでの旅の体験を想像力に包んで描いたものだ。エッセイ “Walking” は、コンコード周辺の逍遥に基づく作品というよりも、一つのテーマによって見事に構成されている作品と考える方が至当であろう。

2

さて、エッセイ “Ktaadn” には天に昇る “pilgrim” の道は明示されていないが、*A Week* (1849), *Walden* (1854), *Cape Cod* (1865) のどの作品にも “pilgrim” の語が用いられていることに、我々は注目する。

“We now no longer sailed or floated on the river, but trod unyielding land like pilgrims.”⁽⁵⁾ “Children come a-berrying, railroad men taking a Sunday morning walk in clean shirts, fishermen and hunters, poets and philosophers; in short, all honest pilgrims, who came out to the woods for freedom's sake, and really left the village behind.”⁽⁶⁾ Today we were walking through Truro, a town of about eighteen hundred

inhabitants. We had already come to Pamet River, which empties into the Bay. This was the limit of the pilgrims' journey up the Cape from Provincetown.”⁷⁰ (下線部筆者)

“pilgrim” とは, “1 a: one who journeys esp. in alien lands: TRAVELER, WAY-FARER b: a person who passes through life as if in exile from a heavenly homeland or in search of it or of some high goal (as truth) 2: one who travels to visit a shrine or holy place as a devotee” (Webster 第三版) の意味だ。見知らぬ土地への(徒歩)旅行者を指す一方で、真理を求めて聖地に赴く loafer の如き旅人のことでもあるのだ。ソーロウが自己を“pilgrim”と考えていたということは、彼の旅が Concord から離れていく外面的なバックパッキングの内側に、内面に向かう精神の旅を含んでいたことになる。このことはソーロウ自身が有名なエッセイ “Walking” の冒頭で語っている。彼自身が Sainte-Terrer=Saunterer であると主張するのだ。Saunterer とは Holy-Lander (聖地巡礼者) であると解説している⁷¹。

ソーロウの旅を考えると、彼の実際の旅よりもその旅から生まれた作品の構成や内容に我々の関心は集中する。例えば、次の逆説的な言葉は興味のあるところである。“The brave man stays at home.”⁷²“...sitting still at home is the heavenly way; the going out is the way of the world.”⁷³“I think I would rather watch the motions of these cows in their pasture... than wander to Europe or Asia and watch other motions there.”⁷⁴ 旅を住みかとし旅に生きたソーロウが如何に内面へ向かう旅を求めたかを示している、と考えられる。筆者には、ソーロウは相当に内向的な人ではなかったか、と思えてくる。エッセイ “A Walk to Wachusett” の中でも、“In the spaces of thought are the reaches of land and water, where men go and come. The landscape lies far and fair within, and the deepest thinker is the farthest traveled.”⁷⁵ とソーロウは主張する。彼の旅は真実のところは精神の旅なのだ、と説明しているのである。このソーロウの思想には、明らかに、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) の影響がある。1842年春発表された “Self-Reliance” の中でエマソンは、“It is for want of self-culture that the superstition of Travelling, whose idols are Italy, England, Egypt, retains its fascination for all educated Americans... the wise man stays at home... Travelling is a fool's paradise. Our first journeys discover to us the indifference of places.”⁷⁶ と述べ、旅に出ることを非難する。ソーロウはこのエマソンの思想を受け継いでいると見ていい。だが、ソーロウはエマソンと異なり、生まの外面の探求に身を投じ、そこに象徴的な意味を発見しようとした。外面的旅を内面探求の旅へと変えてしまうのだ⁷⁷。旅人ソーロウは自己を宗教的に探求する “pilgrim” になるのである。

更に、ソーロウには、想像力にまかせて思うがままに遠隔の地へ遊ぶ心の旅があった、と考えられる。それは彼の豊富な読書から生まれた。ソーロウは旅行記を好み、John Aldrich Christie の調査によれば193点にのぼる⁷⁸。旅行記の読書の影響の最も大きい作品は *A Week* であり、クリスティは Henry Marie Brackenridge の *Journal of A Voyage Up the River Missouri, Performed in 1811* と *A Week* とを比較対照研究し、ソーロウが1837

年にハーバード大学図書館から貸出して読んだこの旅行記が、いかに *A Week* に絶大な影響を及ぼしたかを論じている⁹⁹。多数の読書がソーロウの想像力を豊かにしていることは、ソーロウの読者は夙に知るところだが、それ以上に、彼は読書という知的活動の中で古今東西の世界の旅を自由自在に満喫していたと思えてならないのだ。

冒頭に述べたように、ソーロウの旅はコンコードを中心としたニュー・イングランドの円の中におさまる。ニュー・イングランドを離れたこと自体、講演、仕事、社交等の短期のものを除けば、ほんの3回にすぎない。Quebec と Montreal への旅は、彼の生涯でただ一回の外国旅行であった。これは、彼が旅行だけが目的の旅を常に嫌ったからである。旅はソーロウに作品の構成の枠組みを提供し、ソーロウは“Saunterer”として自己の体験を語るのである。

3

“A Walk to Wachusett” は、1843年1月、*The Boston Miscellany* に発表され、ソーロウの死後 *Excursions* (1863) に収められたエッセイである。これは *The Dial* 誌以外で活字になった最初のエッセイである¹⁰⁰。Mt. Wachusett (2,006フィート) は、コンコードの Annursnack Hill の頂上から望めば、26マイル真西に位置する。マサチューセッツ州の中心を横切って南から北へのびる山系 Monadnocks に属する¹⁰¹。1842年1月兄 John の死はソーロウを悲しみに沈ませたが、夏に入りようやく気力を回復しウォチューセツ山登頂を決意する。

Margaret Fuller (1810-1850) の弟でハーバード大学生の Richard Fuller を同伴者に得た。ソーロウはその前年彼のラテン語の家庭教師を勤めていた。フラーは1842年7月18日 Cambridge から徒歩でコンコードへ向った。ソーロウが寄宿するコンコードのエマスン家に歓迎され、翌朝両者は5時15分前にエマスン家を出発し西に向った¹⁰²。バックパッキングの旅である。Acton, Stow, Bolton を通り Lancaster で昼食をとり、Sterling 西端の Stillwater 川のほとりの村の宿屋で1泊。翌朝空が白みかける頂、Mt. Wachusett の麓まで4マイル歩き、登頂し頂上にテントを張って野営。21日早朝日の出を仰ぎ、正午に下山し、Stillwater, Sterling, Lancaster を抜け、Harvard で1泊。22日にフラーは Groton の家へ帰り、ソーロウはコンコードへ帰った。以上がこのエッセイに記されている4日間の徒歩旅行の行程である。

ソーロウは1842年秋、4日間の旅のノートを作り直し、そこに1841年5月2日の *Journal* の長詩を加え、エッセイに仕上げた。この作品には、1837年、1838年、1841年の *Journal* からの引用があるがそれは少なく、William Howarth が述べているように、一つのテーマの廻りに *Journal* からの記事を集めて寄せ木細工にしたものではない¹⁰³。

このエッセイは次の短詩で始まる。

The needles of the pine
All to the west incline.

この短詩は、1841年5月9日の *Journal* からこのエッセイに組み込まれたものだ。しか

も、作品の冒頭を飾っているので、我々は先ずこの短詩を検討する必要がある。この日の日記は、“The pine stands in the woods like an Indian,——untamed, with a fantastic wildness about it, even in the clearings...”と始まり“The poet speaks only those thoughts...”と続く^④。Richard Lebeaux が指摘しているように^⑤、ソーロウはインディアンのように森に立つ松の木と自己とを同一視している、と解釈していいだろう。こう考えると、この短詩の西に傾く松の木とその葉の暗示するものはソーロウ自身だということだ。ソーロウ自身が西に傾くということは彼の西方志向を意味する^⑥。更に言えば、アメリカの歴史的運命としての西へいくということがこのエッセイの形式になっている、ということである。William Howarth は、更に一步進めて、このエッセイの物語はアメリカという国の物語だと述べているが^⑦、気負いすぎではなからうか。

この短詩の意味を更に掘り下げるには、この短詩に続く短い散文の後の長詩 Wachusett を合わせ読まなければならない。この詩は、1841年5月2日の *Journal* からとられたものである。最後のスタンザのみを引用する。

But special I remember thee,
 Wachusett, who like me
 Standest alone without society.
 Thy far blue eye,
 A remnant of the sky,
 Seen through the clearing or the gorge
 Or from the windows of the forge,
 Doth leaven all it passes by.
 Nothing is true,
 But stands 'tween me and you,
 Thou western pioneer,
 Who know'st not shame nor fear
 By venturous spirit driven,
 Under the eaves of heaven.
 And canst expand thee there,
 And breathe enough of air?
 Upholding heaven, holding down earth,
 Thy pastime from thy birth,
 Not steadied by the one, nor leaning on the other;
 May I approve myself thy worthy brother!^⑧

ソーロウが“special I remember thee, Wachusett, who like me”とウォッチューセツト山に呼びかけるとき、彼のこの山への愛情と限りない慈しみが湧き出す。彼の英国の友人 Thomas Cholmondeley がコンコードを訪れたとき、ソーロウはこの友人をこの山へ案内している程である^⑨。ウォッチューセツト山は“frontier”の山であり、Holy-Lander のソーロウ

が仰望する山である。このスタンザは、この山がソーロウの意識の中にかゝえ込まれ浮き立っていることを示している。そこには、兄 John の面影が二重映しになってはいないだろうか。Richard Lebeaux も述べているように、ウォッチューセツ山への旅では、1839年の舟旅を想い出させたに相違ない。フラーとの旅の記述がほとんどないのもそのためと思われる。こう考えてくると、先に掲げた短詩には兄 John への思いが込められており、自分を“worthy brother”と認めてくれとの願うような叫びが含まれている、と言える。このエッセイは、*A Week* がそうであるように、兄への鎮魂のために書かれた、と筆者には感じられる。

4

“A Walk to Wachusett”の中心的メタファーはウォッチューセツ山である。Sherman Paul がすでに指摘しているように、この山はフロンティアと西部に関連する人間の本源的關係を発見する場所なのだ⁶⁴。山へ行くことは西へ行くことであり、西へ行くことは上昇であり天へ登ることである。上昇は、Walden 湖での水浴にも似て、清めの行為である。聖地へ赴く者が身を清め生贄を神に供え神を宥めるという行為は、古代からの宗教的儀式であった。山に到着したソーロウは、山に登り始める前に、どんな儀式を行ったであろうか。

As we gathered the raspberries, which grew abundantly by the roadside, we fancied that that action was consistent with a lofty prudence; as if the traveler who ascends into a mountainous region should fortify himself by eating of such light ambrosial fruits as grow there, and drinking of the springs which gush out from the mountain-side, as he gradually inhales the subtler and purer atmosphere of those elevated places, thus propitiating the mountain gods by a sacrifice of their own fruits.⁶⁵

路傍のキイチゴを摘んだとき、ソーロウはその行為の崇高さを思う。山腹から流れ出る泉の水を飲み、山の菓物の生贄によって山の神々を宥めるのである。ソーロウはこれを俗界から離れ聖山へ登る意味をもった儀式と考える。Richard Carl Tuerk は、“Sacrament”という言葉を用いてこの儀式の意味を指摘した⁶⁶。頂上にテントが張られると、完全に下界から隔絶する。そのテントの中でソーロウは、新たな喜びにひたって Virgil と Wordsworth を読む。聖地の喜びをソーロウは得意な誇張によって語り、ウォッチューセツ山(2,006フィート)の高さを3000フィートだと述べる。そこには、25才の青年ソーロウの情熱と理想主義が表われており、ロマンチストの面目躍如たるものがある。

We at length pitched our tent on the summit. It is but nineteen hundred feet above the village of Princeton, and three thousand above the level of the sea; but by this slight elevation it is infinitely removed from the plain, and when we reached it we felt a sense of remoteness, as if we had traveled into distant regions, to Arabia Petraea, or the farthest East.⁶⁷

ソーロウの精神は際限なく広がる。ウォッチューセツ山からイングランドのヘルベリン山

へ、更に、詩歌と文芸の象徴のバルナッソス山へとイメージは拡大していく。学芸の女神ミューズの訪れとホメロスの出現をも想像する。ウォッチューセツ山はギリシャの山と重なっていく。現実の山から離れた果てしなく遠いものへの憧憬はロマンチズムの作家に共通して見られるものであり、この山は、現実のフロンティアの山というよりも、ソーロウの意識の中に特別にそびえる山となっていく。現実の確固たる山が提示され内面の世界のものへ高められていく。この山頂は神々の住むところでもある。“Before sunset, we rambled along the ridge to the north, while a hawk soared still above us. It was a place where gods might wander, so solemn and solitary, and removed from all contagion with the plain.”⁶⁴

このエッセイが最高の高まりを見せるのは、頂上で一夜がようやく白みかける朝に移りゆくとき、頂上で迎える早朝の景観と眺望である。ソーロウは果てしなく続く樹海の荘厳さにうたれ、文学的感動の筆致で真迫性をこめて次のように描き出す。

When the dawn had reached its prime, we enjoyed the view of a distant horizon line, and could fancy ourselves at sea, and the distant hills the waves in the horizon, as seen from the deck of a vessel. . . We could see how ample and roomy is nature. As far as the eye could reach there was little life in the landscape; . . . Wachusett is, in fact, the observatory of the State. There lay Massachusetts, spread out before us in its length and breadth, like a map. There was the level horizon which told of the sea on the east and south, the wellknown hills of New Hampshire on the north.⁶⁵

ソーロウがウォッチューセツ山へ行ったのは、人間と自然の関係、人間の本源的在り様を発見するためであった。彼は、山が宇宙全体の計画の中で自然の他の総ての部分と相互関係にあること及び造物主が自然のいかなる部分にも関与していることを悟るのである。それは、この引用文の後に続いて述べられるソーロウの直覚する Organic な宇宙観に基づく。“We could at length realize the place mountains occupy on the land, and how they come into the general scheme of the universe. . . We confess that the hand which moulded their opposite slopes, making one to balance the other, worked round a deep centre, and was privy to the plan of the universe. So is the least part of nature in its bearings referred to all space.”⁶⁶

この宇宙観はソーロウがエマスンから学んだものである。このエッセイの思想性は、この宇宙観の提示にあり、それはソーロウがウォッチューセツ山への旅で得た人間の本源的関係でもある。ソーロウの場合、エマスンのように抽象的にそれを述べる方法とはらない。ウォッチューセツ山の自然そのものを描き、それを崇高へと導き、そこに神聖と神秘を賦与することによって、大自然の計画された有機的造化の有り様を述べるに至るのである。ここに彼の芸術的手腕があり、このエッセイの文学的価値が認められると言える。

“A Walk to Wachusett” は、構成の面から見ても評価されるべきである。Lauriat Lane, Jr. は、このエッセイの基本構造は三つの部分に分けられると述べている⁶⁴。(1)山へ、(2)山で、(3)山からがそれである。しかし、筆者の私見によれば、4つの部分と考えたい。Wachusett の詩を掲げウォッチューセツ山への旅の目的は精神の旅にあることを暗示させる提示部、

コンコードからスターリングの宿までの徒歩旅行、登頂から頂上での体験が述べられる超絶主義的中心部、そして、下山から帰路の終末部である。

このエッセイでは、提示部で読者は強烈に引き込まれていく。徒歩旅行の途中の自然の描写は、絵画的で牧歌的で芸術的だ。中心部は、このエッセイの最も迫力に満ちた部分であり、緊張感が高まる場所である。終末部は軽いタッチでおさえられている。

これは、コンコードから自然に入りまたコンコードへ帰環する物語である。この物語の型は、ソーロウの後々の主要作品の構成の型として踏襲されており、ソーロウはこのエッセイで彼の旅物語の型を発見した、と言える。この点は、William Howarth が指摘したところでもある⁹⁾。古く Sherman Paul が指摘したように¹⁰⁾、ソーロウは、“A Walk to Wachusett”の中で、山と平地、上昇と下昇、日の出と日没、森と村、朝と夕べ、というエッセイの祖型をとり入れている。これは *A Week* や *Walden* の構成として受け継がれている。例えば、このエッセイで、登頂の朝、エマソン家を出発する朝、頂上での朝は総て期待感に溢れており力強く述べられている。*Walden* の朝のメンドリの原型がここにある、といえるのである。

James McIntosh のことばを借りれば¹¹⁾、“A Walk to Wachusett”には二つのレベルの旅が語られている。一つは、マサチューセッツ州コンコードからウォッチューセット山までの限定された自然への旅であり、他は、個人の思想という限界のない世界への旅である。実は、ソーロウの後の作品の多くはこうした視点で読むことができるのだ。また、そう読むべきであろう。だとすると、このエッセイは、超絶主義の代表的作家ソーロウの文学の原点となっている、と言える。彼の後の作品のいろいろな萌芽がこのエッセイに宿っているのである。

〔注〕

- (1) William Howarth, *Thoreau in the Mountains: Writings by Henry David Thoreau* (New York: Farrar Straus Giroux, 1982), p.4.
- (2) Robert Sattelmeyer, “Away from Concord: The Travel Writings of Henry David Thoreau,” unpubl. diss. (Ann Arbor, 1968), p.64. 本論はこの論文に負うところが大きい。
- (3) Henry David Thoreau, *Journal, The Writings of Henry David Thoreau* (1906; rpt. New York: AMS Press, 1968), II, p.73.
- (4) “Away from Concord,” p.134.
- (5) Henry David Thoreau, *A Week on the Concord and Merrimack Rivers, The Writings of Henry David Thoreau* (1906; rpt. New York: AMS Press, 1968), I, p.324.
- (6) Henry David Thoreau, *Walden, The Writings of Henry David Thoreau*, II, p.170.
- (7) Henry David Thoreau, *Cape Cod, The Writings of Henry David Thoreau IV*, p.132.
- (8) 拙稿「Thoreau の荒野と野生——西方志向の特質——」『長野工業高等専門学校紀要』第9号, 1978. pp.81-95.
- (9) *Journal, The Writings of Henry David Thoreau*, VII, p.106.
- (10) Henry David Thoreau, “A Winter Walk,” *The Writings of Henry David Thoreau* (1906; rpt. New York: AMS Press, 1968), V, p.174.
- (11) *Journal, The Writings of Henry David Thoreau*, IX, p.104.
- (12) Henry David Thoreau, “A Walk to Wachusett,” *The Writings of Henry David Thoreau*

- (1906; rpt. New York: AMS Press, 1968), V, p.135.
- (13) Ralph Waldo Emerson, “Self-Reliance,” *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson* (New York: AMS Press, 1968), II, pp.80-81.
- (14) Richard Carl Tuerk, “Circle Imagery in the Prose of Emerson and Thoreau: from *Nature* (1836) to *Walden* (1854),” unpubl. diss. (Ann Arbor, 1967), p.135.
- (15) John Aldrich Christie, *Thoreau As World Traveler* (New York: Columbia University Press, 1965), pp.313-333.
- (16) *Ibid.*, pp.251-256.
- (17) “Away from Concord,” p.35.
- (18) *Thoreau in the Mountains*, p.23.
- (19) Richard Fuller, “Visit to the Wachusett,” *The Thoreau Society Bulletin*, No. 121, pp. 1-4.
- (20) William Howarth, *The Book of Concord: Thoreau's Life As a Writer* (New York: The Viking Press, 1982), p.29.
- (21) *Journal, The Writings of Henry David Thoreau*, I, p.258.
- (22) Richard Lebeaux, *Young Man Thoreau* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1977), p.161.
- (23) 拙稿「Thoreau の荒野と野生——西方志向の特質——」, pp.81-95.
- (24) *Thoreau in the Mountains*, p.24.
- (25) “A Walk to Wachusett,” *The Writings of Henry David Thoreau*, V, p.135.
- (26) Henry Seidel Canby, *Thoreau* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1939), p.362.
- (27) Sherman Paul, *The Shores of America: Thoreau's Inward Exploration* (New York: Russell & Russell, 1958), p.159.
- (28) “A Walk to Wachusett,” *The Writings of Henry David Thoreau*, V, p.142.
- (29) “Circle Imagery in the Prose of Emerson and Thoreau,” p.136.
- (30) “A Walk to Wachusett” *The Writings of Henry David Thoreau*, V, pp.142-143.
- (31) *Ibid.*, p.144.
- (32) *Ibid.*, pp.146-147.
- (33) *Ibid.*, p.148.
- (34) Lauriat Lane, Jr., “Thoreau's Two Walks: Structure and Meaning,” *The Thoreau Society Bulletin*, No. 109, pp.1-3.
- (35) *The Book of Concord*, p.29.
- (36) *The Shores of America*, p.157.
- (37) James McIntosh, *Thoreau As Romantic Naturalist: His Shifting Stance Toward Nature* (Ithaca: Cornell University Press, 1974), p.139.

(本論は、昭和56年7月4日、富山大学において開かれた中部地区英語教育学会第11回総会で発表した拙稿「ソーロウの旅」を改題し改稿したものである。)